

隼人の埋葬

序 説

河 口 貞 徳

【弥生の生産】

南九州には、弥生時代から古墳時代にかけて、地下式横穴とか、地下式板石積石室、或いは立石墓というような、この地域独自の埋葬法があります。これに付いてお話を申し上げたいと思います。

本題に入ります前に、この独自の埋葬法が生まれた環境に付いてみたいと思います。

南九州の地域に、弥生文化が入りましたのは、弥生文化発生直後で、海岸線と、海岸から奥地へ入り込む水系に添って弥生前期の遺跡が分布して、そのことを示しております。

例えば西海岸では、飯島里村中馬場遺跡、川内市楠平遺跡・大小路遺跡、吹上町帆立遺跡・今田遺跡、内陸部の松元町東昌寺遺跡、金峰町高橋貝塚、薩摩半島南岸では、最近発見された枕崎市山内遺跡が有ります。

鹿児島湾沿岸では、鹿児島市玉里遺跡・高見遺跡、国分市口輪野遺跡、垂水市境遺跡、大根占町山ノ口遺跡、鹿屋市浜田遺跡などがあります。

大隅半島南東岸では志布志町片野祠穴が有り、内陸部では末吉町深川楠木岡C遺跡があって殆ど県下全域に前期の遺跡が分布しているのであります。

問題は、弥生文化が伝播した後、如何様に発展したかと言うことであります。御存じのように南九州には、現在いろいろな問題を抱えているシラス台地が広く分布しております。これは、先史時代にあつては更に大きな影響を与えたものと思われます（県本土の70％）。

シラス台地は、縄文時代にあつては、狩猟の場としては最適でありましたが、弥生文化の水稲耕作にとっては大きな障害となつたはずであります。一方稲作に必要な低湿な平野にはあまり恵まれていません。従つて、南九州にあつては、住民の生活を支えるには、不十分な農耕生産力を補うためには、狩猟や、採集に頼らざるを得ない状態におかれたと思われるのであります。

そのことを示す事例として上げてみますと、高橋貝塚では、出土した獣魚骨貝類は、その種類・量において、縄文の貝塚と比較して遜色がなく、骨魚牙器も多く出土し、骨製の釣針さえも製作し、その生活は縄文時代のそれと殆ど差異がなかったと推定されます。

テキスト12葉真ん中の写真は、吹上町入来遺跡から出土した、壺形土器に貯蔵されたイチイガシで有ります。この遺跡は弥生中期前半の時期であります。この時期においてもなお、堅果類が重要な食料であつたことを示すものであります。

視点を覚えて習俗の面から見てみたいと思います。

12葉上段は、縄文晩期の上加世田遺跡から出土した、軽石製石棒と岩偶及び配石遺構の縁に立てら

2 卑人の埋葬

れた石棒の写真であります。この配石遺構からは、ヒスイの管玉も出ております。

この上加世田遺跡の遺構、遺物につながる遺跡が、弥生中期後半の、大根占町山ノ口遺跡で発見されております。

12葉下段の写真は、山ノ口遺跡から出土した、軽石製石棒・陰石・岩偶でありますが、これらはかなり大きなもので、石棒は40cm、陰石は34cm、岩偶の小は26cm、大は30cmで有ります。これらは、いずれも配石遺構の縁に配置されたもので、上加世田遺跡とまったく同好であります。12葉中段にみられるように、中期前半の入来遺跡からも、軽石製石棒・岩偶が発見されており、これらの遺構遺物は、縄文時代からの系統を引くことは明らかで、縄文の性器信仰が弥生中期後半にも、生き続けていたことが解ります。大きな岩偶の両耳の部分には、前後に貫通する穴がありますが、これは、耳栓を嵌めた状態を示すもので、習俗にも縄文的なものが残されているのであります。南九州においては、生産体制、信仰・習俗などの面でも、縄文的な様相を色濃く残していると思われるのであります。

南九州ではこの後、後期の遺跡が激減したと思われ、現在判明している遺跡は、金峰町の中津野遺跡と、松木遺跡だけであります。

【成川様式土器——卑人の土器——】

南九州が、土器文化の変遷の中で、他の地域と大きく異なる事は、弥生土器→土師器と言う流れを踏まず、土師器の時期即ち古墳時代に、土師器の代わりに弥生土器の形質を強く残す、成川式土器が行われたことであります。この原因は、前に述べた生産体制や、信仰・習俗などが深くかわっているものと考えられますが、そのほかに民族としての異質的な存在がその根底にあったと思われる（階級分化社会へ進んだ地域と従来のままの原始共同体社会のまま停滞した地域との相異なる社会構造が文化伝達の障壁となった）。

成川式土器は、従来薩隅式或いは、薩摩式と呼ばれたもので鹿児島県に広く分布し、弥生後期と考えられていた物であります。調査の積み重ねによって、時期は古墳時代に属し、四世紀から六世紀乃至七世紀に至るものと言うことが解ってきました。この間全国的な流れになっていた土師器は、殆ど波及せず、八世紀になってようやく伝播してきたのであります。

一口に成川式と呼んでいますが、この中には数型式の土器型式が含まれていることが、次第に解ってきて、目下その型式分類を進めている段階になっております。従って三世紀乃至四世紀間に渡って行われていた土器を、一型式の呼び名と同じに、成川式と呼ぶことは不適當で、成川様式と呼ぶ方が良いかと思います。

成川様式の分布に付いてみますと、鹿児島県の全域と、宮崎県の大半に及んでいるようであります。

【熊襲・卑人は異民族】

従来、熊襲・卑人は、現在も地名として残っているように、住んでいた地名から出たものという

説が述べられて、裏に異民族ではないとする考えが込められているように思われます。

金岡丈夫博士は、成川遺跡人について「顔が低い、眼窩も低い、下肢ことに脛骨が長い、脛骨扁平が強い。脛骨扁平の強いことは一般原始民の特徴で、アイヌや日本石器時代人はすべてこれが強い。

身長低く頭形短く、顔面が低いという点で、成川遺跡人は北九州地方の弥生人とは非常に異なっている。それは今日のサツマ人と北九州人との違いと同じ様相を呈している」と述べております。

長崎大学の松下孝幸氏は、宮崎県野尻町大萩地下式横穴出土の人骨について「本例は男女とも短頭型に傾き、顔面頭蓋には強い低・広顔傾向が認められ、また鼻根部もそれ程扁平ではない。四肢骨は一樣にやや小さく、女性上腕骨は扁平であり、脛骨および大腿骨上部も男女ともに扁平であり、また男性大腿骨の両側面は後方へ突出していると述べ、また同県の、灰塚、日守、上の原、旭台、本庄28号墳及び菓子野の各地下式横穴出土人骨合計75体についてその形質の特徴を明らかにし、その結果について、本県の地下式古墳のうち上の原、旭台及び大萩地下式古墳人は短頭で、菓子野地下式古墳人は長頭であるが、顔面頭蓋は本庄28号地下式古墳人を除いて、一樣に低・広顔傾向が強く、またこれらの鼻根部は山口県の朝田古墳人ほど扁平ではない。しかし近年、本庄28号墳出土人骨や柿の木原地下式横穴出土人骨などにはこれらと異なる特徴が認められており、本県の地下式古墳人にはある程度の地域差が存在するかもしれない」と述べております。

以上の記述を見ると、南九州の古墳時代人は北九州引いては畿内の人とは異なった特徴をもっていたものと思われ、古代においては、このことに対する認識が、異人雑類という記述となって現れたものと思われます。

一方南九州の中にあっても、また地域によって差異があることも、これらの記述から解るのであります。

隼 人 の 埋 葬

隼人の埋葬についてお話しあげたいと思います。隼人は、古代に、南九州にいた人々で、我々には極めて関係の深い種族であると思います。隼人については、色々の研究がありますが、今日は遺跡・遺物の面から、この問題を考えてみたいと思います。

文献では、隼人は5世紀半ば以降に現れます。熊襲は隼人の前身と解釈しますと、埋葬について考える場合、熊襲の時代も含める必要があります。それを考古学の時代区分に合わせますと、弥生時代の半ばから古墳時代の終り若しくはその少し後までということになります。

遺物の面で申しますと、南九州では、生活の中心を成す土器に、弥生中期から変化が現れ、古墳時代になると、他の地域では、土師器や須恵器が使用されるようになりますが、南九州では、依然として弥生土器の儘の成川様式の土器が、使用されております。

遺跡の面で申しますと、南九州では、他の地域では見られない、独特の埋葬法が行われております。それは、地下式横穴、地下式板石横石室、立石墓と言う3通りの埋葬法で有ります。

4 隼人の埋葬

地下式横穴

地下式横穴の埋葬法は、3葉上の図を見て頂きますと、地表面から2メートル前後の縦穴を掘りまして、底から横方向に掘り進み、奥を大きく掘り拡げて、遺体を納める為の家形の部屋を作ります。

遺体を納める部屋を玄室、縦穴から玄室に通ずる短い入り口を、羨道と申します。埋葬をするときは、まず玄室に遺骸を納めた後、種々の品物を遺体に副え、羨道の所で、石か、土の塊、又は板を用いて閉塞します。縦穴は土を埋め戻して、地表面にはなにも残さないように致します。

地下式横穴は、1葉の図にありますように、日向大隅において行われ、鹿児島県では、大口盆地と、志布志湾沿岸に見られます。この埋葬法が行われた時代について申しますと、5世紀の半ごろに始まり、8世紀ごろまで続いております。

地下式横穴の発生については、いろいろの説があります。大陸の古墓に基づくものとか、前方後円墳の横穴石室に基づくとか、或いは地域独自の埋葬法であるなどであります。

最後の説は、地下式横穴は、畿内型の古墳が伝播する前からある地域独特の埋葬法であったとするもので、その根拠としては、東諸県郡六野原遺跡で最大の第10号墳円墳の下に、第10号地下式横穴が構築されていたことを挙げ「地下式横穴は、円墳が作られる以前から存在した」と主張しているのであります。

実は、六野原古墳群は、昭和17年に、飛行場を作るために消滅しましたが、この時、第10号墳の墳丘も除去され、完全に調査されました。その結果、当然円墳に有るべき筈の埋葬施設である「棺も柩」も見当たらなかったのであります。したがって地下式横穴こそ、この円墳の埋葬施設であったことが判明したのであります。この事実によって、地下式横穴を埋葬施設として、設けた円墳の存在が明らかになり、逆に円墳と地下式横穴が、一体のものであることが証明される結果になりました。

この様な地下式横穴を持つ円墳は、宮崎県東海岸の古墳地帯に、畿内型古墳に混ざって、数多く発見されました。

【地下式横穴の発生】

地下式横穴の発生についてみますと、景行天皇の熊襲征伐の頃、中央の勢力が、南九州の東海岸に伸び、その影響を受けて、地元にも豪族が発生し、これらの豪族が、中央の古墳を真似て、円墳を作りましたが、墳丘中に棺・柩などの埋葬施設を作ることによって、地下に横穴を設けたものと思われる（倅ってと言うより、規制されたと言うべきであろう）。

円墳を持つ地下式横穴は、最も古いタイプで、2葉の西都原の第111号円墳の下で第4号地下式横穴の様に、規模が大きく、死後の住まいという考えがあったのか、玄室を、家形に作り、鏡・玉・剣などの三種の他に、短甲などの豪華な副葬品を有し、被葬者が、生前に富と権力をほしい儘にしていたことを忍ばせます（部族の酋長が地位を保全されたものであろう）。

地下式横穴の変化に就いてみますと

地下式横穴は、時代が進み、また内陸部へ浸透するにしたがって、封土を失い、規模は小さくなり、玄室の形もドーム状に変形し、副葬品は、貧弱で、殆ど武器のみとなっております。3葉の下図（北方地下式横穴）がその例で、古式の単独の埋葬から、複数の埋葬に変わっていることが解ります。

以上のような埋葬の状況や、須恵器・土師器の浸透の様子などから見ますと、地下式横穴の分布地域では、中央文化の波及の度合いに、段階的な差異がみられます。

最も影響を強く受けているのは、海岸地帯で、宮崎県の東海岸地帯では、最も影響が大きく、豪族が多く現れ、その支配による、階級社会が出現します。

続いて、鹿児島県の志布志湾沿岸にも、階級社会発生の様相が、若干見られます。所が、内陸部に入ると、中央からの影響が極めて微弱で、殆ど見る事ができず、原始共同体的な段階に、停滞します。大口盆地地域はその最たる物と言うことができます。

【地下式板石横石室】

次に、薩摩地域に行われた、地下式板石横石室について申し上げます。

地下式板石横石室は4葉の下図にありますように、地表面から縦穴を掘り、底部に平たい石を用いて石室を作ります。石室内は遺体を納め、副葬品を添え、土を被せながら、板石で屋根を葺くように覆い、途中でも副葬品を置きながら埋葬するもので、全てを土で覆って、地表面には何らの痕跡も残さないものであります。

【方形石室と、円形石室】

石室の形には、大きく分けて二通り有ります。方形と円形で、その中間的な形もありますが、これは両者の移行形と見る事ができます。

方形石室は海岸地帯に、円形石室は内陸部に分布しておりますが、そこで当然どちらが本来の形かと言う議論が起ります。

【円形源流説】

第一は、「円形源流説」とも言うべきもので、円形石室を持つ地下式板石横石室が源流であり、先づ内陸部に4世紀ごろ発生し、次第に海岸地帯に波及して方形石室に移行し、5世紀ごろに終わった、とするものであります。

【方形源流説】

第二は、「方形源流説」と言うことになりましょう。この説は、海岸地帯に於いて、方形石室を持つ地下式板石横石室が弥生時代に発生し、内陸部へ波及して円形石室に移行したというものであります。

7葉は、始良郡吉松町永山の地下式板石横石室群の一部であります。川内川に沿った低い台地の

6 卑人の埋葬

線に、百基ほどの地下式板石積石室が群集しております。下の図は遺跡北端の第10号地下式板石積石室で、周溝を持っております。これは、被葬者の身分に、格差が生じたことを示すもので、極めて重要な遺跡であります。周溝には大形の甕や、高杯が供献されており、4世紀末か5世紀初頭のものと思われます。

地下式板石積石室の祖源につきまして申しますと

5葉の図は長崎県の五島列島にある弥生時代中期の埋葬遺構であります。

上の写真と4葉上の別府原地下式板石積石室の写真を比べますと、非常に似ていることにお気づきかと思います。

この両者の類似性から、恐らく五島の弥生時代の埋葬遺構が地下式板石積石室の源流であろうと考えたのでありますが、お互いが離れ過ぎている点で、この説の難点がありました。

最近、中間点の出水郡長島町明神下岡に於きまして、弥生時代から、古墳時代に及ぶ、地下式板石積石室群が発見され、この問題が解決しました。

6葉の図は、明神下岡遺跡の遺構を示したものであります。この遺跡では30基の地下式板石積石室が発見されました。1号は大きな方形石室を持ったもので、古墳時代のものであります。(図省略)

問題は図の26号遺構であります。比較的小さな石室であります。立派な地下式板石積石室であります。この、26号からは弥生中期の一ノ宮式土器が出土しております。

この事実によりまして、五島の松原遺跡2号遺構や、浜郷遺跡1号遺構、明神下岡の26号遺構が、地下式板石積石室の祖形で、方形石室であることも明らかになりました。

明神下岡遺跡の発見によりまして、地下式板石積石室の源流は、九州西岸の島嶼にあり、弥生中期に発生したものであることが証明されたのであります。

更にここで、朝鮮半島南部の支石墓と比較すれば、半島南部の支石墓にその淵源がある事も、明らかであります(此のことについては末尾に付記有り)。

地下式横穴が畿内型古墳文化に触発されて、5世紀半ばに発生し、東海岸から内陸部へ波及したのとは対照的に、地下式板石積石室は弥生中期に発生し西海岸から内陸部へ波及していることが解ります。

【立石墓】

次に薩摩半島南部にある阿多の立石墓であります。指宿郡山川町成川遺跡は、山麓の南斜面に形成され、面積は約1.5ヘクタール有ります。遺跡の南東の隅に立石があることから、「立石墓」の名が付けられました。埋葬が行われたのは、弥生時代後期から、古墳時代の4世紀から6世紀に至る間で、確認された人骨は422体、陪葬された土器は1千個、鉄器は3百点以上に及んでおります。

8葉の図は、成川遺跡の南東部であります。図の中ほどに、1号立石と言うのがあります。これが最も大きな石で、この付近では埋葬が行われた度に、送り火が燃やされ、その跡に炭や灰が厚く堆積して残っております。

この埋葬で最も大きな特徴は、土壌を掘って遺体を納め、床面には副葬品を置かず、そのまま土を埋め戻して、地表面に至って始めて、土器や鉄器を供献する習俗が行われていたことです。このような埋葬法は他に例がありません。

供献された土器や鉄器は、一人一人の個人に供えられたものではなく、この墓域に眠る全ての人々に供えられたものであります。

この埋葬法は、これを営んだ集落の性格を良く物語っております。その社会は権力者のいない、原始共同体社会であった事を示しています。

【立石墓の源流】

立石墓の源流は、久しく不明でありましたが、最近、弥生中期の祭祀遺跡ではないかと考えるようになりました。

11葉の写真は、肝属郡大根占町の山ノ口遺跡の一部であります。

山ノ口遺跡は、大根占町の南端に有りまして、当時の（弥生中期）海岸の砂浜に、1m余りの柱状の石を建て、それに沿って、軽石の礫を円形に並べ、これを取り巻くように弥生中期の壘と竈をセットで供献し、回りで焚火をして祭りを行った、弥生中期の祭祀遺跡であります。これが成川立石墓の原型と思われます（成川でも立石・配石－8葉図左下－が見られる）。

成川遺跡には、3つの時期が有りまして、第1期は弥生中期の祭祀遺跡で、第2期は弥生後期の埋葬遺跡、第3期は古墳時代の埋葬遺跡であります。

第1期についてみると、〔根固石を持つ立石〕

9葉の上の図は、8葉の図より更に広い範囲を、納めたものでありまして、右下に、第1期と有り太い線で囲った長方形の区域があります。これが弥生中期の祭祀遺構であります。10葉の上の図は、この中の立石の図で、輝石安山岩の板石を、地表に1m内外を現して建て、その立石の基部に沿って弥生中期の壘又は竈を地表に供献しております。

本来は1枚石でありましたが、基部を根固石で固めてあるために、外力を受けた際、中程から折れたものであります（開聞岳第2期爆発によるものと思われる）。

立石・配石を備え、弥生中期の壘と竈を供献している点、山ノ口遺跡と全く同じであります。

【第2期、T字状立石】

第2期は9葉の、第1期の西隣りに当る、東西に長い長方形の地域であります。下の図の×印のイロハはT字状立石で、イの西隣に弥生後期の壘棺がありまして、この時期から埋葬が行われたことを示しております。

10葉の中の図は、第2期のT字状立石の様子を描いたメモであります。形からT字状立石と名付けたもので、第1期とは異なり、2枚の輝石安山岩板石を用い、1枚を支石として垂直に建て、残りの1枚を笠石状に支石の上に載せたものであります。

恐らく第1期の立石が、中ほどで折れているのを見て、本来の姿と思い、これを真似たものと思います。

8 卑人の埋葬

【第3期、単純立石】

第3期は、第1期、第2期の地域も取り込んで山の斜面全城1.5ヘクタール程に拡がり、立石は基城の南東隅の山麓に二拾数基が建てられています。

板石のほかに、柱状の石も用い、第1期・第2期と異なり根固石や、笠石をもたないために、転倒したものが多く見られます（10葉下写真）。

以上に申しましたところで、解りますように、立石墓は弥生時代中期の祭祀遺跡に基づくものと推定されますが、同類は枕崎市松之尾遺跡・指宿市指宿観光ホテル遺跡があり、今後も新しい発見が予想され、その分布は拡がる可能性があります。

【卑人の社会】

卑人の埋葬を地域別に見てきましたが、大隅の宮崎県に属する東海岸地域は、埋葬遺構の状態から見て、5世紀半には、畿内系の豪族が輩出し、その支配下には入った様であります。鹿児島県にあっては、多少の力を持つものが現れたにしても、未だ微々たるもので、志布志湾沿岸に小豪族が現れた程度で、大口地域では吉松の辺りに気配を感じる程度であります。

薩摩の地下式板石積石室地域では、副葬品の貧弱な状態から見て、大隅地域より更に貧弱で、永山遺跡に豪族出現の素地がみられる程度であります。

阿多の立石墓地域に至っては、全く原始共同体社会の状態に停滞していたと見られるのであります。

南九州地域は、古代には他の地域に比べて相当遅れていたものと思われ、日本書記の仲哀天皇のくだりに、皇后神懸かりして曰く「天皇なにぞ熊襲まつろわざることを憂い給う。これ青穴の空國ぞ。豊兵を挙げて伐つに足らむや。云々」と有りまして、その貧弱な様子は、中央でも良く知られていたわけであります。

【文化停滞の原因】

縄文時代には大変盛っていた南九州が、この時代にいたってなぜ衰えたのか？

その原因は幾であります。しかしここで考えられることが一つあります。それは生産様式の変革であります。縄文時代の末に、大陸から水稻耕作の技術が日本列島に伝わりました。もちろん南九州にも、この技術は最も早い時期に伝わったのであります。こうして世の中は弥生時代になりました。

新しい農耕生産の結果、次第に生活は安定し、集落の規模は大きくなり、新たに生まれたムラを運営する為の組織が生まれ、一方では富の蓄積も行われ、クニと呼ばれる大集落も発生したわけですから。

この様な状況の中で、以前には勝れた狩猟場として人々の生活を支えてきたシラス台地が、水稻耕作にとっては不毛の地となって、大きなダメージを与えるものとなりました。

南九州とくに鹿児島県では、シラス台地が広大な面積を占め、水稻耕作に欠くことのできない低湿地が、極めて限られた地域にしか存在しなかったのであります。もちろん水稻耕作は行われまし

たが、これだけでは人々の生活を変えることは出来ません。

広大な面積を占めるシラス台地は、やむなく従来どおりの狩猟の場として使用され、縄文時代さながらの生活が続けられていったと推定されます。

南九州の埋葬形態に見てきた、文化の停滞性は、埋葬形態の源流に基づいて、様々な段階を呈する事が、今迄申しあげましたことで判明しましたが、それがすべてではありません。むしろ主要な要因は南九州が、置かれた風土に有り、それが生産様式に与えた影響が大きかったと思われます。

付 記 地下式板石積石室の発生

発生については、円形・方形のそれぞれを祖形とする説があった。その中で高尾野町堂前遺跡の17号墳は板石葺きの長方形土壌墓で免田式の長頸甕が供献されており、方形石室を持つ地下式板石積石室の祖形とされた。これは有力な資料であったが、昭和59～60年に行われた、出水郡長島町明神下岡遺跡の調査で（明神下岡遺跡、1986）決定的な資料が発見された。この遺跡は弥生時代から古墳時代に至るもので、板石積石室と見られる30基の埋葬遺構が発見された。遺構には3つのタイプがある。

①は石室を蓋石で覆い、その上を板石で葺き、更にその上に椀石を置くもので4基ある。②は①のタイプから椀石を失ったものと考えられ、石室を蓋石で覆い、その上を板石で葺いたものである。遺跡の主体を成すもので18基を数える。

石室には長さ1～2メートルの大型のものと、60～70センチの小型の2種類があり、大型のものは、石室の一部に小口積み的手法を用いて上面を平坦に整える手法を用いたのがみられる。土師器・須恵器・鉄器などの副葬品を出土したものがみられる。

小型のものでは、26号石室から弥生中期の一ノ宮式甕形土器の他数片の弥生土器を出土している（6葉図）。

③は石室の上を、直ちに板石を用いて屋根状に被覆したもので、地下式板石積石室そのものである。この類に属する19号石室から須恵器・鉄器が出土している。4基が検出された。明神下岡遺跡発見後、昭和50年に発見された隣の東町の小向江古墳は、3基発見されたがいずれも③類で須恵器・鉄刀を出土し、6世紀に比定されている。小向江古墳が③類のみであったことは、この形態が定型化してきたことを示すものであろう。

「金載元・尹武炳『韓国支石墓研究』国立博物館ソウル1968」によると、支石墓を北方式と南方式に分け、

北方式は、2枚の壁石の上に巨大な板石を置くもの。

南方式は、更に3類に分けられ、

第一類は、4枚以上の板石で地表下に石室を作るもの。全域に分布し、最も古い。

第二類は、石積の石室、又は組合式石棺が地表の大石と分離して、別に石蓋を持つもの。全域に分布し、次に古い。

第三類は、更に、大石と石蓋を持つ石室との間に、数個の支石を持つもの。南半に分布し、最も

新しい。と述べている。

この分類に明神下岡の遺構を当て嵌めてみると、明神下岡の①類が支石墓南方式の第三類に当る。両者の構造を比較してみると、第三類の地表の大石、支石、有蓋の石棺は、それぞれ、①類の撐石、葦石、有蓋の石棺に当たり、第三類の支石が①類の葦石に転移したものと考えれば、両者の密接な繋がりが推定される。

明神下岡の②類は、①型の撐石を欠失したものであり、③類は②型の蓋石を欠失したものと言える。従って三者は一系列に属するもので、時代的にも①類から②類、③類へと移行したものであり、系統的には朝鮮半島南部の支石墓に源流を発するものと言える。

「小田富士雄『五島列島の弥生文化—総説編—』1970」によると、五島列島北端の宇久島松遺跡では、昭和43年の発掘で支石墓が発見されているが、それより古く、明治5年にも1基発見されていると言う（宇久島郷土誌）。43年出土の支石墓は撐石のみで、支石を欠くが、明治5年発見のものは、1枚の平石の下に4個の石塊が矩形状におかれていたことからみて、金載元・伊武柄の南方式支石墓の第一類に当るものと見られる。

松原遺跡からは、箱式石棺2基が出土し、中通島浜郷遺跡からは、昭和44年の第二次発掘によって、箱式石棺5基が出土している。これらの石棺について、特殊な構造が注意されるとして、代表的な例として浜郷遺跡の1号石棺と、松原遺跡の2号石棺をあげ、南九州の地下式板石積石室との類似が説かれている。埋葬された人骨が、膝を立てたまま出土することから、板石が砂を満たしながら積まれたと推定されている。

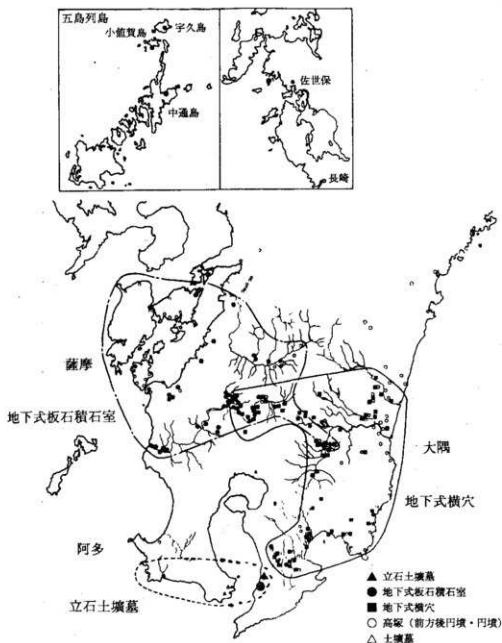
上にあげた例を、明神下岡遺跡の石室と比較すると、その構造が③類とすべての点で良く一致し、南九州に分布する地下式板石積石室の内、方形石室のものと全く同じ形態である。但し浜郷遺跡の1号石棺には域ノ越式の重形土器が副葬され、松原遺跡の2号石棺は周辺の状況から須玖式の時期とされており、共に弥生中期に属するので、古墳時代に属する南九州の地下式板石積石室とは時期が一致しないという問題がのこる。

時期については、明神下岡遺跡に於いて①類・②類・③類という一系列に属する石室遺構が見られ、そのうち②類に属する26号石室が弥生中期に属する事実などから、両者は一系列上に存在すると考えられる。

松原遺跡1号石棺には板付Ⅰ式の壺形土器が副葬されており、地下式板石積石室の系統は、弥生時代の前期まで遡るものと考えられる。朝鮮半島南部の支石墓は、縄文晩期に北九州に伝播するが、九州西方の島嶼に伝播したものは、弥生後期に南九州に入り、古墳期に盛行し、のち円形石室も派生した。円形石室は内陸部に多く分布する傾向がみられる。かくして、北九州に伝播したものは壺棺葬と結び付いて行くが、南九州に、やや遅れて伝播したものは地下式板石積石室となったのである。

隼人の埋葬

地下式横穴（大隅） 地下式板石積石室（薩摩） 立石土墳墓（阿多）



地下式横穴

宮崎県高崎市西都原 地下式横穴第4号

第111号円墳の下に昭和31年4月30日発見

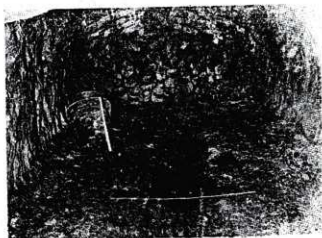
玄室、平面形は長方形、長さ5・5m、幅2・2m、高さ1・76m、地表より深
の深さ2・7m 天井は切妻形

周床、無竹形、長さ3・5m、幅4・5cm、深さ10cm

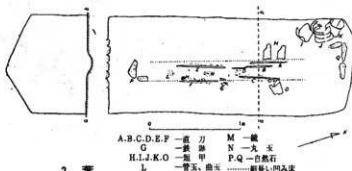
副葬品、碧玉製管玉16個、ヒスイ製勾玉1個、赤文鏡1面（以上副葬品付近）、直刀
5把、鉄鍬40〜50本（両側）、青色ガラス製丸玉179個、磨石製管玉1
1個（周床中央）、短甲3個（玄室北隅）。 墓穴及び墓道は未調査



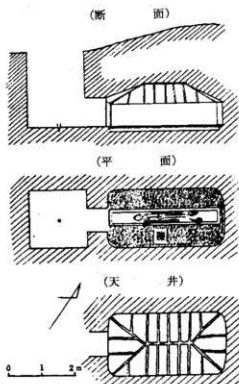
西都原地下式横穴4号と111号墳丘との重なり合い



地下式第四号墳の玄室内部



地下式横穴



六野原地下式第2号墳実測図(「六野原古墳調査報告書」による)

玄室 長さ169cm

幅 90cm

高さ62cm

1号墳

鹿児島県姶良郡栗野町
地方地下式横穴第1号



一号墳

宮崎県東諸県郡国富町

六野原地下式横穴第2号 昭和17年消滅

屍床 長さ 3・2m

幅 50~32cm

深さ 15~13cm

縦穴 深さ2・2m 羨道 幅 76cm

長さ65cm

高さ86cm

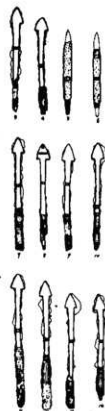
玄室 長さ3・3m 天井は四注

幅 1・8m 玄室は長方形

高さ1・23m 羨道は妻入り

副葬品 斧頭 1、刀 2、鉄族 10

0 10cm



北方古墳出土遺物

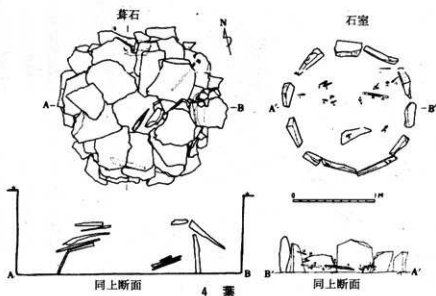
地下式板石積石室

薩摩郡薩摩町別府原古墳 (昭和44年3～4月発掘調査)



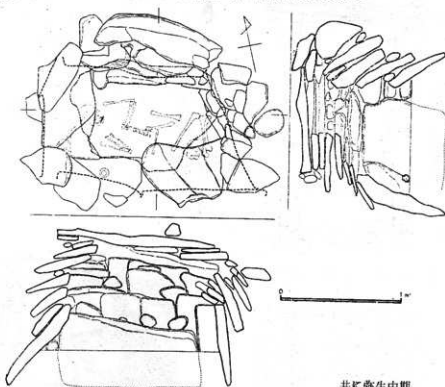
1号墳葺石

別府原1号墳



地下式板石積石室

松原遺跡 2号石棺



共に弥生中期

第31図 浜郷遺跡(第二次) 1号石棺構造図

地下式板石積石室

出水郡長島町明神下岡遺跡

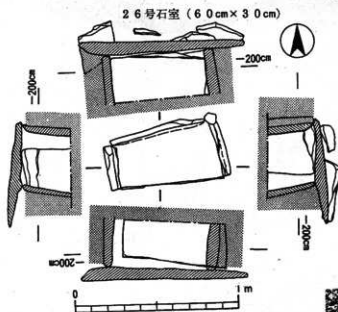
(昭和59年4月発掘調査)



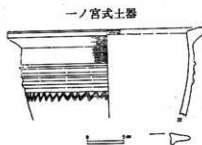
26号石室



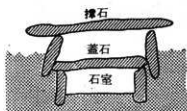
26号石室検出状況



26号石室 (60cm x 30cm)



26号石室出土土器

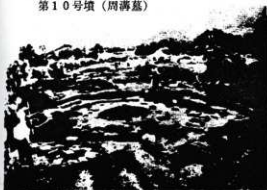


9号石室 石 (下に蓋石あり)

地下式板石積石室

始良郡吉松町永山遺跡 (昭和48年8月発掘調査)

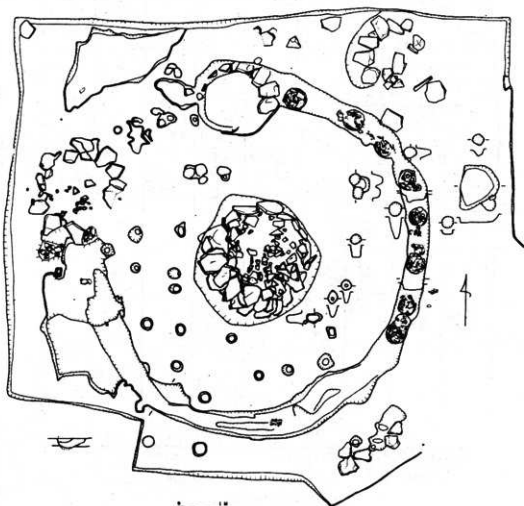
第10号墳 (周溝墓)



10号墳出土の
剣 と



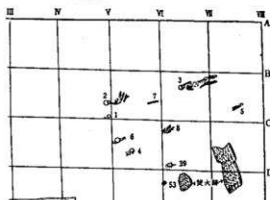
富溝出土の壺形土器 永山10号墳周溝出土の高杯



永山10号墳周溝遺構

立石墓

第一調査区

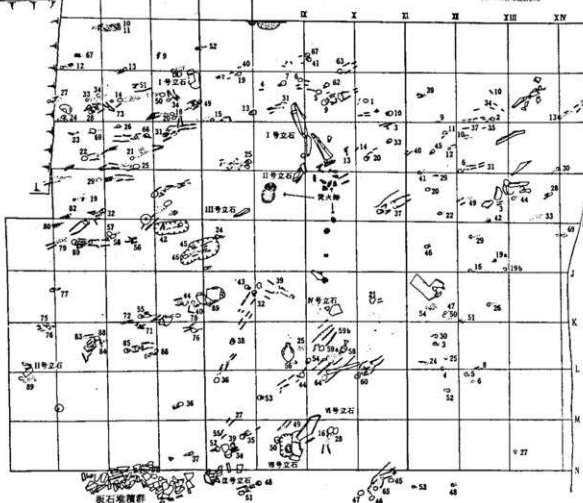


指宿郡山川町成川遺跡

(昭和33年発掘調査)

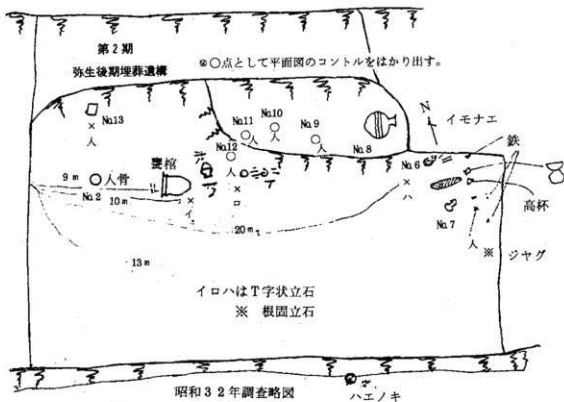
第二調査区

第三調査区



人骨等出土状態図 (Fig. 6)

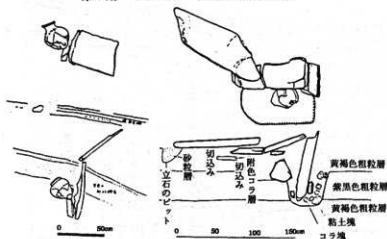
成川遺跡



昭和32年調査略図

成川遺跡

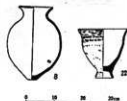
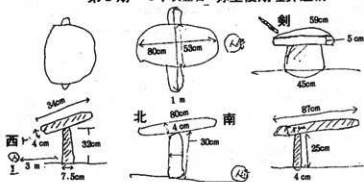
第1期 根固立石 弥生中期祭祀遺構



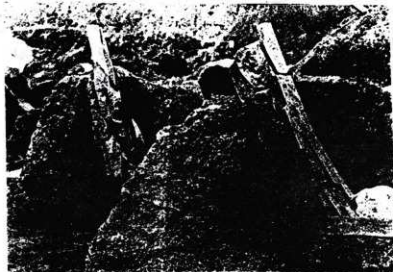
第1期土器



第2期 T字状立石 弥生後期埋葬遺構



第3期 単純立石 古墳期埋葬遺構

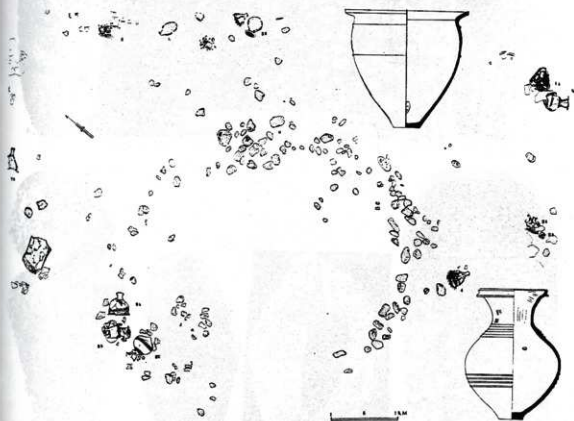


第3期土器



山ノ口遺跡 弥生中期 祭祀遺跡

昭和33～36年発掘



上加世田遺跡

縄文晩期

石棒・岩偶



配石の縁に立てた石棒



1



2

入来遺跡

弥生中期前半

石棒・岩偶



3



■に貯蔵されていたイチイガシ



4

山ノ口遺跡

弥生中期後半

石棒・陰石・岩偶



5



6



7



8